
英雄王と王たる三傑

七草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄王と王たる三傑

【Nコード】

N9935X

【作者名】

七草

【あらすじ】

第5次聖杯聖杯でセイバーとの決戦に敗れた黄金のサーヴァント——ギルガメッシュは座へ帰った。だが、座へ帰したギルガメッシュを待っていたのは謎の声と誘い。『余興か……存分に我を楽しませろ』

僕らの英雄王として、皆の金ぴかとしてギルガメッシュが行くのは恋姫の世界！ 王たる姿を見せられるのか！？

王の出陣（前書き）

今回、初めて二時創作に挑戦します七草ななくさと申します
至らない所ばかりだとは思いますがよろしくお願いします

王の出陣

第5次聖杯戦争も終幕を迎えようとしていた。

騎士王と英雄王による熾烈を極める一騎打ちに決着がつく。

軍配は騎士王に上がった。

「手に入らぬからこそ美しいものもある……なかなか楽しかった」

そう言い残し、英雄王——ギルガメッシュは日本冬木市から姿を消した。

ギルガメッシュは目を開ける。周囲は何もない真っ白な空間が広がっていた。

「我^{オレ}の部屋ではないな」

視野ではなく感覚が『違う』と告げる。
訝しげに周囲を見渡していたギルガメッシュに声が届く。

『英雄王よ』

「何者だ？」

『神、とても名乗っておこう』

「……ではその神とやらが我^{オレ}に何用か？」

『英雄王、お前にはもう一働きしてもらおう』

「王である我^{オレ}に働けと……」

目を閉じる……一秒……二秒……三秒……時間が止まる。
そしてギルガメッシュの口が開く。

「何かは知らんが暇つぶしの戯れにはなるだろう……では連れてい
け」

『では説明を』

「いらぬ。我^{オレ}は自分の目で見たものしか信じぬ。それにな……余興
の内容を聞いてもつまらぬ」

『はっはっは！ それでこそ英雄王だ』

豪快に笑った神を名乗る者はギルガメッシュに告げる。

『では時間だ。頼んだぞ英雄王』

「命令するな。だが良いだろう。我^{オレ}を楽しませろ」

自身を待ち受ける余興を楽しまんと、身を乗り出し光のなかへと消えていく。

光から抜け出たギルガメッシュは周囲を見渡すが視野にあるのは森。

「なんだここは？ 我オレに無礼だとは思わぬか」

キッと目を細め愚痴を漏らす。個人に向けられたものではない。この世全ての人間……生あるものに向けられた言葉だった。

「頭かしらっ！ 珍しい服を来た餓鬼がいやすぜ」

突然聞こえてきた声にギルガメッシュは苛立った様子で振り向く。その先にいたのは20人ほどの男の集団だった。

「餓鬼……だと？」

「大人しく身包みを置いていきな」

「そうしたら命だけは見逃してやらんこともない」

ギルガメッシュの問いを無視した男たちは勝手に話を続ける。
彼らは賊と呼ばれる種類の人間。

「持て成しはなし、出迎えは小汚い雑種ときたか」

根っからの王様気質のギルガメッシュは、今自分を取り巻く
状況に眉を寄せる。

爆発間際の爆弾よろしくすでに臨界点に達しようとしていた。

「なに言って」

「誰に許しを得て口を開いている」

———パチン。

乾いた音がギルガメッシュを中心に響く。

次の瞬間、ギルガメッシュを取り囲んでいた賊の1人が声を
上げ地に倒れていた。

「な、なんだコイツは？」

「コイツ……？」

——パチン。

再び音が鳴る。

音の正体はギルガメッシュが指を弾く際に発生するものだった。

音に呼応するように一振りの剣が射出される。

「雑種如きには過ぎた物だが、これも戯れよ……王の財宝」
ゲート・オブ・バビロン

その言葉を皮きりに、ギルガメッシュの背後の空間が歪み、剣、矛、戟、薙刀……様々な武器が顔を覗かせた。

その光景を見て賊たちの顔に、困惑、驚愕、畏怖の念が浮かぶ。

人は誰しも、知らないもの、見たことのないものには恐怖を感じる。それも明確な殺意と共に向けられたものなら尚更。

固まったままの賊徒に視線を送っていたギルガメッシュはおもむろに上げた手を振りかざす。

「ひれ伏せ」

.....

.....

.....

数十秒後、ギルガメッシュの周囲には物言わぬ賊徒の死体がゴロゴロと転がっていた。人の死んだにも関わらずギルガメッシュからは感情の揺らぎが見て取れない。

ギルガメッシュにとって人間とは、数が多いだけの下等生物として映っていない。

そんな人間が死んだところで一喜一憂するわけがなかった。それを象徴するように、ギルガメッシュの意識は別のものへと注がれていた。

「覗き見するとは、王に失礼だとは思わぬか？」

側にある茂みに向かって話しかける。

「も、申し訳御座いませぬ」

ギルガメッシュの声に気付かれていたことを悟り、茂みから出てきたのは1人の老人であった。

「先ほどから見ていたな」

「ありがとうございます！」

唐突に頭を下げた老人にギルガメッシュは表情こそ普段の物だが少しばかりだが驚く。人を殺して憎まれることはあるが感謝されるのではない。

「あれを見て逃げ出さぬとはな。話してみろ」

「先ほどの人間はこの辺りを荒らし回っていた賊なのです。それを倒してくださいありがとうございます」

そう言うと老人は自分たちを救ってくれた英雄に、ここで待つように促すと茂みの中へと消えていった。一分もしないうちに戻ってきた老人の手には幾ばくかの金が握られていた。

ギルガメッシュは眉一つ動かさず静止。英雄王たるギルガメッシュにとってはチンケな金には用がなければ興味もない。

だが老人のような普通の人間にとっては、生きるために必要な金。それを自分に差し出す心意気にギルガメッシュは「ほう」と呟くと老人に話しかける。

「金などいらぬ」

「で、ですが」

「金はいらぬ。そうだな……飯を用意しろ。人の体では腹が減って仕方がない」

「……？ ここにはありません故、ワシの村に案内いたしましょう」

一瞬ギルガメッシュの言葉に疑問符を浮かべた老人だったが、恩人がお腹を空かせているのだ。お礼をするため先導してギルガメッシュを案内していく。



村へと案内されたギルガメッシュは、手厚い歓迎を受けていた。

一部始終を目撃した老人は村人たちに説明をしたのだ。

夜になってからも宴は続きギルガメッシュの機嫌は上々。決して豪華とはいえない料理の数々だが、一つ一つに感謝の念が籠もっている。

本来、これで満足するはずのないギルガメッシュだが、余興を楽しむため郷には入れば郷に従えという言葉通りに順応していた。村人も自分たちを脅かす賊という存在がいなくなったことに喜び、村を救った英雄と共に宴を楽しむ。

だが、そんな宴を台無しにする出来事が起こった。

「ぞ、賊だーッ！ 賊が攻めてきたぞ！」

1人の男が叫んだ。

叫びの内容が響き渡ると同時に、村全体に、村人全員に恐怖が走り抜ける。

ギルガメッシュが殺した賊徒は一部だったのだ。仲間の死体を見た賊の仲間が攻めてきたのである。

「貴方様は逃げてくだされ。一時ひとときとはいえ不安がなくなり、村全体に笑顔が満ちた。ありがとうございました」

ギルガメッシュを案内した村の長——老人が話しかける。1
0人単位の人間を容易く殺してのけたギルガメッシュといえど、2
00を上回る賊とでは勝負にすらならないと判断しての言葉だった。

「貴様たちはどうする？」

「貴方様に勇気を希望を貰った。ワシたちは戦いますじゃ」

目を閉じたギルガメッシュは数秒思考に耽る。この間も賊たちは村へと迫っていた。

「では御達者で。本当にありがとうございました」

「……待て」

「な、何か？」

目を閉じていたギルガメッシュは立ち上がり宣言する。

「王に撤退はない。我オレが出よう」

「加勢してくださるのですか？」

「加勢……？　クハハハハッ！　加勢ではない行くのは我^{オレ}だけよ」

「それでは勝負になりませぬ」

「これから起こるは勝負ではなく、王による雑種への蹂躪^{オレ}よ。我の身を案じて出た発言ということで無礼を許す。が、次はないと心得よ」

ギルガメッシュの圧倒的な力を感じ取ったのか老人は息を呑んだ。

「ではワシらも」

「我^{オレ}1人でよい。少しでも前に出てみる。貴様であろうと生の保証はない」

一歩、一歩と歩く姿からは王たる風格。

そして楽しんでいた所へと、無粋にも攻め込んできた賊への怒りが感じられた。

「なに、貴様らは宴を続けていればよい。王を出迎えるその時まで」

そう言い残すと、村の入り口へとギルガメッシュは消えてい

った。

「雑種が……王の邪魔をするては万死に値する」

賊は一夜ならぬ、10分もしないうちに全滅させられた。

王の出陣（後書き）

少し変更点があるので、この場を借りて説明させていただきます

- ・バビロン内の得物は本来の宝具ではなくよく切れるレベルの得物
- ・魔力を気力に変更
- ・気力を消費すると、疲労が溜まる

等のギル様弱体化となっております……と言っても圧倒的物量で戦うのは相変わらずなので、ご安心をW

感想等お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9935x/>

英雄王と王たる三傑

2011年11月16日10時09分発行